

禅の衆生観—とくに宋代禅宗と日本僧を中心に—

駒澤大学 佐藤 秀孝

禅の衆生観というと、江戸期の白隠慧鶴が『坐禅和讃』で仏と衆生を水と氷の関係に譬え、本来不離のものと解している。沢庵宗彭も『不動智神妙録』にて、やはり本心と妄心は水と氷のようであるとし、一カ所に留まらない伸び広がった本心を仏の心、思い詰めて一カ所に凝り固まった妄心を衆生（凡夫）の心となしている。水と氷は別物ではない、仏を離れて衆生はなく衆生を離れて仏はないという発想が禅の衆生観といえよう。

禅宗のこうした捉え方は悟りを得た境地から語られたものであり、初めから衆生をそのまま仏と同格に論じているわけではもちろんない。坐禅辨道を介して仏と衆生が別物でないことを諦めるのであり、修行や悟道を経ない衆生がそのまま仏として認められているのではなく、坐禅修行している姿が仏行なのである。

平安時代末期から鎌倉初期にかけて入宋した日本僧が中国禅宗（宋朝禅）の修行を体験した当初、彼らはどのように禅の衆生観を受け入れたのであろうか。その例を入宋僧の覚阿や道元らの事跡を通して窺ってみたい。

『嘉泰普燈録』巻二〇「覚阿上人」の章によれば、平安末期に入宋して杭州靈隱寺の瞎堂慧遠に参じた際、覚阿は『華嚴経』の「心仏及衆生、是三無差別」の理を問い質している。それまで培ってきた素養から執拗に問いを發する覚阿に対し、慧遠は「衆生虚妄見、見仏見世界」と答え、さらに覚阿が「無明因何而有」と迫ると、慧遠は禅家特有の作略を用いすぐさま打ち据えている。覚阿の質問はきわめて鋭いものがあり、慧遠は禅宗独自の手段を用いて矛先を交わしている。『仏海瞎堂禅師広録』巻三「示日本国覚阿」の法語によれば、理論で責めてくる覚阿に対し、慧遠は「金牛作舞」の公案を与えている。これは馬祖下の鎮州金牛が自ら飯を炊いて門下の修行僧に日々供養しつづけた公案であり、具体的に粥飯を修行僧に供する実践をもって衆生済度のありようを示したものにほかならない。日本仏教の教学理論で責めてくる覚阿を慧遠は禅宗の学人接化の実際から受け応えていることになろう。その後、諸山歴遊の際、覚阿は遠く聞こえる鼓声を聞いて悟道し、靈隱寺に戻り慧遠の印可を得て帰国している。慧遠のもとには奇僧で知られた済顛道済（済公）などもおり、覚阿は宋朝禅の衆生接化の醍醐味を受け継いで帰国していることになろう。『元亨釈書』巻六「釈覚阿」の章によれば、宮中に招かれて高倉天皇らが見守る中、覚阿は横笛を一吹きし、これを禅の要旨であるとして座を下りているが、誰も真意を解する者はなかったと伝えられる。覚阿の思いは空回りに終わり、後代

に受け継がれることはなかった。

一方、栄西の場合、黄龍派の虚庵懐徹のもとで中国の禅宗と日本の密教に関して問答を展開し、両者は禅宗と密教（台密）の一致を認め合っている。帰国した栄西は覚阿の失敗を十分踏まえた上で兼修禅を唱えて禅宗の存続を追求した。また楊岐派の無門慧開に参じた日本僧無本覚心の場合は、慧開のもと「心仏如如」の理を示されており、これも「心仏及衆生、是三無差別」のありようを述べたものと解され、帰国して後、覚心は密教（東密）を踏まえた兼修禅を唱えている。

入宋求法した道元の場合、種々の問題意識が天童山の如浄の応対によって逐一解決していくやり取りが『宝慶記』に示されている。当時、南宋に到った日本僧たちはみな教学的素養が高く、深い問題意識をもって入宋求法している。そんな高次の教理で責めてくる日本僧に南宋禅者はかなり対応に苦慮したものらしく、坐禅や公案参究など禅宗独自の接化をもって彼らを迎え入れたことが窺われる。『正法眼蔵』の「仏性」の巻で道元は「一切衆生悉有仏性、如来常住無有変易」の語句をもとに独自の衆生観を示し、「菩提薩埵四摂法」の巻では布施・愛語・利行・同事の四摂法を説き、衆生に対して菩薩行を日々努めることを勧めている。

キーワード 入宋求法僧 宋朝禅 衆生と菩薩行